

「いばら姫」糸つむぎの正体は？

—絵本における解釈—

櫻井千絵

1 はじめに

本稿ではグリムの「いばら姫」“Dornröschen”をさまざまな角度で考察し、日本における受容の諸相および絵本による新たな解釈を明らかにすることを目的とする。

今回取り扱った資料は、書店や図書館で一般的に入手しやすく、幼児や児童への影響が見られると思われる以下の10点を対象とした。タイトルの“Dornröschen”の訳語として、「いばら姫」のほか、「ねむり姫」も対象としたが、原作がシャルル・ペローのものと明記しているものは除外した。

文献一覧

- A 『ねむりひめ』 絵：フェリクス・ホフマン 訳：せたていじ 1963年
福音館書店
- B 『いばらひめ』 絵：エロール・ル・カイン 訳：矢川澄子 1977年
ほるぷ出版
- C 『いばらひめ』 絵：スベン・オッター 訳：矢川澄子 1978年
評論社
- D 『いばらひめ』 絵：伊藤悌夫 文：関根栄一 1982年
株式会社チャイルド本社
- E 『ねむり姫』 絵：ロロンス・パティニュー 訳：佐々木田鶴子 1987年
偕成社
- F 『ねむりひめ』 絵：牧野鈴子 訳：山内清子 1988年
三起商行株式会社
- G 『いばらひめ』 絵：新井苑子 文：矢崎節夫 1996年
フレーベル館

- H 『いばらひめ』 絵：広野多珂子 文：西本鶏介 2003年
株式会社チャイルド本社
- I 『ねむりひめ』 絵：佐々木恵未 構成：古藤ゆず 2004年
株式会社学習研究社
- J 『いばらひめ』 絵：バーナデット・ワッツ 訳：福本友美子 2007年
BL出版株式会社

(出版年順, 以下本文中では出版年で略記する)

2 グリムにおけるDornröschen

この物語では主人公がいわゆる“被害者型”であり, その点「灰かぶり」や「白雪姫」などと共通している。不当に辛い試練にあいながらも, 最後には王子と幸せになるという展開は根強い人気を誇っているようだ。

呪いにより100年の長い眠りにつき, 王子の助けで目を覚ますという「いばら姫」のモチーフは, ペロー童話集にも「眠れる森の美女」としておさめられている。王子の登場で姫が目を覚まし, 二人が結婚するところまではグリム版とほぼ同じだが, ペロー版ではさらに結婚後のエピソードが続いている。一国の王となった夫との間にかわいい子供が生まれたものの, 人食いの姑から危害を加えられるなどの試練が王妃に訪れる。しかし最後には人食い女が退治され, 王妃たちは助かるというものである。

日本で出版されている絵本を見ると, ペロー童話集からの再話としているものも, 後半の嫁姑の確執部分は省略し, 王子と姫の結婚式で終えているものが主流である。この点に関しては, 絵本の対象年齢が低いことを鑑みれば理解できることであろう。

3 日本の絵本では?

次にいくつかの点に注目し, 日本で出版された絵本を詳細に見ていく。

3-1 “Die weisen Frauen (賢い女たち)” とは?

姫の誕生パーティーで, 幼い姫に贈り物を授ける“賢い女”たちとはそもそもどういった人物なのだろうか。ヤーコプ・グリムによると「“賢い女”とは神と人間の中間にある存在で, 運命を見とおす叡智と超自然的な力をそなえていて, 人間が

生まれるときにあらわれて運命を予言したり，才能をあたえたり¹⁾するという。グリム童話集の初版本においては“Fee(妖精)”となっているが，グリムはこれを第二版からdie weisen Frauenと書き改めている。“賢い女”はDornröschenのほかいくつかの物語の中に登場するが，“魔女”とは一線を画し，人々に好意をもった人物であり，善人として描かれており，悪意を持った“賢い女”はいばら姫に呪いをかける人物ただ一人である。

一方日本の絵本ではどうだろうか？

10点の内訳を見ると以下のようないくつかの訳語に分かれた。

- 占い女 2 (1963年, 1987年)
- 仙女 2 (1977年, 1978年 ただし訳者同じ)
- 妖精 2 (1982年, 1996年)
- 魔女 2 (1988年, 2004年)
- 魔法使い 2 (2003年, 2007年)

「占い女」というと，運命を見とおす能力を持つ“賢い女”という意味合いを帯びており，グリムの第7版に最も近いといえる。グリムの初版のように「妖精」としているものもあれば，呪いをかける悪意を持った人物に合わせて，悪いイメージを帯びた「魔女」という言葉を使っているものもある。

性別に関しては，「魔法使い」「妖精」としているものも，「まほうつかいのおばあさん」(2007年)と女性と明示してあったり，あるいは絵により女性と推察されるものも含め，すべて女性であった。

3-2 姫への贈り物

また彼女たちの姫への贈りものの詳細を以下にまとめる。

1963年	よいところ	うつくしさ	おかねもちになるしあわせ
1977年	徳	美しさ	富
1978年	徳	美しさ	富
1982年	うつくしさ	やさしいところ	
1987年	しとやかであるように	うつくしくなるように	

	おかねもちになるように		
1988年	やさしさ	うつくしさ	ゆたかさ
1996年	すてきなおくりもの		
2003年	やさしいところ	うつくしさ	まずしくならないしあわせ
2004年	うつくしくなれ		
2007年	やさしいところ	しとやかさ	うつくしさ

グリム版では「徳」「美」「富」の順であり、矢川澄子の訳2点(1977年, 1978年)ではこの原作に忠実である。そのほかのものでは子供に分かりやすくという配慮からか、おもに「徳」の訳に工夫と変化が見られるが、4点(1982年, 1996年, 2004年, 2007年)では「富」について触れていない。また「美しさ」は1点(1996年)を除いてすべて明記されている。(その1点においても、「おひめさまは それは うつくしい しょうじょに なっていきました」と王女が美しいということには間違いない。)

この姫への贈り物からは理想とされる女性像、あるいは大人が女の子に望む理想の姿が読み取れる。つまりグリムの時代において理想であった「徳」「美」「富」の中で、現代の日本において「富」についてはほぼ満たされているのか、若干影が薄くなったものの、「徳」は時に「しとやかさ」など形を変え、「美」は相変わらず健在であるといえる。

3-3 塔の上の老婆は誰だったのか？

次に、塔の上で糸をつむいでいた老婆の正体について考察する。

王の命令により王国中のつむが焼かれたにもかかわらず、よりによって城の中でひとり糸をつむいでいた老婆はいったい誰なのか姫がちょうど15歳になったまさにその日に、王と王妃は出かけており、姫は城に一人残された。城の中を歩きまわっているうちに古い塔に行き着き、狭いらせん階段をのぼると小さなドアの前に出た。

「鍵穴にささっていた小さな鍵をひねるとドアがぱっと開き、小さな部屋の中でおばあさんがつむでせっせと麻糸をつむいでいるのが見えました。『こんにちは、おばあさん』お姫さまは言いました。『何をしているの?』『糸をつむいでいるのです。』おばあさんはそういうとうなづいて見せました。『そのぐるぐる回っている面白そうなものは何?』お姫さまはそうたずねると、つむを手にとって自分で回そう

としました。ところがつむに触った途端、魔法の呪いが実現してしまい、指をさしてしまったのです。その瞬間、姫はそこにあったベッドに倒れこみ、深い眠りに落ちてしまいました。そしてその眠りは城中に広がっていったのです²⁾」。

このあと第7版では城の中の様子の描写が続き、老婆がどうなったかについては一切触れられていない。(初版では王女と老婆の会話の描写はないものの、王女が塔の上の小部屋に入った場面で「姫はこのおばあさんが気に入って、おばあさんと冗談を言ったりしました。」という文があり、王女の主観が表れている。)老婆に悪意があったのかなかったのか、グリムのテキストだけでは判断しにくいですが、1869年のドイツ一枚絵124号を見ると、王子が見つけたときに、姫の傍らで老婆も一緒につむを手にしたまま眠っている姿が描かれていることから、老婆は善良な市民にすぎないと解釈できる。

一方、時代と場所がかわって、現在出版されている日本の絵本ではどのような描写になっているだろうか？

10点中出版年の新しい4点(1988年、1996年、2003年、2004年)においては、その顔つき、表情や服装など外見から、老婆は姫に呪いをかけた人物と同一人物であるとはっきりとわかる。(図1参照)新井苑子版(1996年)ではさらに、姫が老婆に話しかける場面で「おばあさんは にやりと わらうと、つむをさしだしました。」と、文章からも老婆が姫に対し悪意を持っていることを読み取ることができる。

またこの4点すべて日本人画家であることにも注目してよいのではないだろうか。

つまり現代の日本では、幼い姫に呪いをかけた魔女(あるいは「まほうつかい」「ようせい」「仙女」)が、その呪いを成就させるため15年後に自ら塔の上で待ち伏せしていた、という解釈が一般的であり、物語として自然な成り行きとされているといえるのではないだろうか。

またここでは原作から派生した新しい解釈が、なにより絵本という形態に見られることに注目したい。つまり、グリムの原作に忠実な文章だけでは測りえない点(ここでは老婆の正体)について、絵本の絵によって別の解釈が可能になったのである。

4 絵本における演出

Jens Thieleによると、絵本は演劇や映画にも似て、いろいろな分野からなる複合



図1 絵：牧野鈴子『ねむりひめ』1988年 三起商行株式会社より

芸術であり、絵本の分析というものは、絵と文章の構造や、その美的効果と演出効果に言及すべきだという³⁾。

絵本の絵というものは単に文章を補足するものに限らず、絵と文の二つの“綱”が絡み合うことにより、絵本の“言語”が発達するという⁴⁾。

この観点で、「いばら姫」の問題の個所を出版年の古いものに目を向けてみる。

1963年、1977年、1978年、1982年、1987年の5点においては（日本人画家は、1982年の伊藤悌夫のみ）、塔の上の老婆と、呪いをかけた人物が同一人物であるとはっきりとは明示されていない。しかし再度以下の2点において、絵による演出に注目し、その効果を検証してみた。

どちらもテキストは矢川澄子の翻訳で、グリムの原作の完訳である。

まず1977年のエロール・ル・カインによる絵本についてみていきたい。

ル・カインの世界では、仙女たちはみな背中に羽根がはえており、美しい妖精のような姿で描かれている。仙女たちは孔雀に乗っており、城の中の壁画や、王たちの服装にも孔雀のモチーフが用いられていることから、孔雀が守護神のように扱われていると考えられる。一方宴に招かれなかった仙女だけは黒づくめの服を着た老女であり、ドラゴンにまたがり空を飛んでいる姿などが描かれている。

絵本の構成としては、見開きで一構成となっており、片方のページにル・カインの絵、もう片方に文章が来ているが、文章の周りにも額縁のように、物語の展開に見合った、小さな絵が取り囲んでいる。

さて問題の老婆の姿はどう描かれているかという点、ル・カインの絵本では、微笑みを浮かべながら糸車を回す小柄な老婆には、一見悪意を持った仙女の面影はないようである。

しかしここでページを一枚さかのぼってみる。(図2参照) 姫が15歳になったという最初の場面では、城の庭に一人たたずむ姫の可憐な姿が描かれている。夕暮れの美しい庭で遠くを見つめる姫の傍らには二羽の孔雀もおり、姫を守るかのようである。しかし、彼女の背後にはいたるところに邪悪な小さな生き物が潜んでいるのである。二本の角と尖った鼻、尖った尻尾がはえている。絵の前面には鉢植えの影



図2 絵：エロール・ル・カイン『いばらひめ』1977年 ほるぷ出版より

で姫の後ろ姿をいじわるそうな眼で見つめるもの、塔の入り口の暗がりには、まるで姫に向かって誘うかのように、あるいは仲間に合図を送るかのように塔の上を指さすもの、さらに左ページの文章の周りにも似たような醜い生き物が描かれている。そのためこの見開きページ全体に、姫の美しさと対照的に、一見平和で静かな城の中に潜む邪悪で不吉な雰囲気漂っている。この場面で物語は姫が塔の上の小部屋まで行き着くところまでが書かれており、不気味な空気を匂わせながらページをめくるといよいよ老婆が登場するといった具合である。しかも老婆自身に怪しいところはないとしても、ページ全体をよく見ると、ここにも壁に蛇が描かれていたり、角のはえた不気味な顔が浮かんで見えたり、文章を取り巻く小さな挿絵の中にもとがった鼻と耳を持つ、醜い小鬼が座り込んでいるのが見える。老婆が呪いをかけた仙女と同一人物でなくとも、不吉な予感ますます高まり、仙女の呪いが実現するであろうことを予測することができるのである。

この絵本の中では、呪いの実現がル・カインの絵により、いっそう効果的な演出がなされているといえよう。

さらにもうひとつ、同じく矢川澄子訳でスペン・オットーの絵による1978年版を見ていく。ここでは仙女たちは13人全員同じ衣装を着ており、宴に招かれなかった仙女だけが若干年をとっているようにも見えるが、大きな違いは見られない。

そして塔の上の老婆に関しても、これと違って特徴のないごく平凡な老婆がつむを手にして座っている姿で描かれており、不気味さも不吉さも感じられない。

しかし、次の場面に目を移すと、つむに刺され倒れた姫に背をむけて部屋を出ていく老婆の後ろ姿が描かれているのである。(図3参照) 姫が倒れ眠り込んでしまった瞬間、文章では「そのねむりは、おしろぜんたいにひろがってゆきました。」と書かれているまさにその場面で、扉を開けて出ていく老婆の後ろ姿からは、姫が倒れたため、あわてて助けを呼びに出ていったと考えることができようか？

ル・カインと比べるとオットーの絵には、多くの仕掛けはなく、むしろ淡白な印象を受けるが、だからこそいっそう、物言わぬ老婆の後ろ姿は気味悪さを漂わせている。

以上、老婆の正体を探りながら絵本を検証していくと、おとぎ話の解釈にはまだ自由なゆとりがあり、絵による表現次第では新たな解釈や、独自の演出も可能なのである。

「いばら姫」糸つむぎの正体は？
—絵本における解釈—

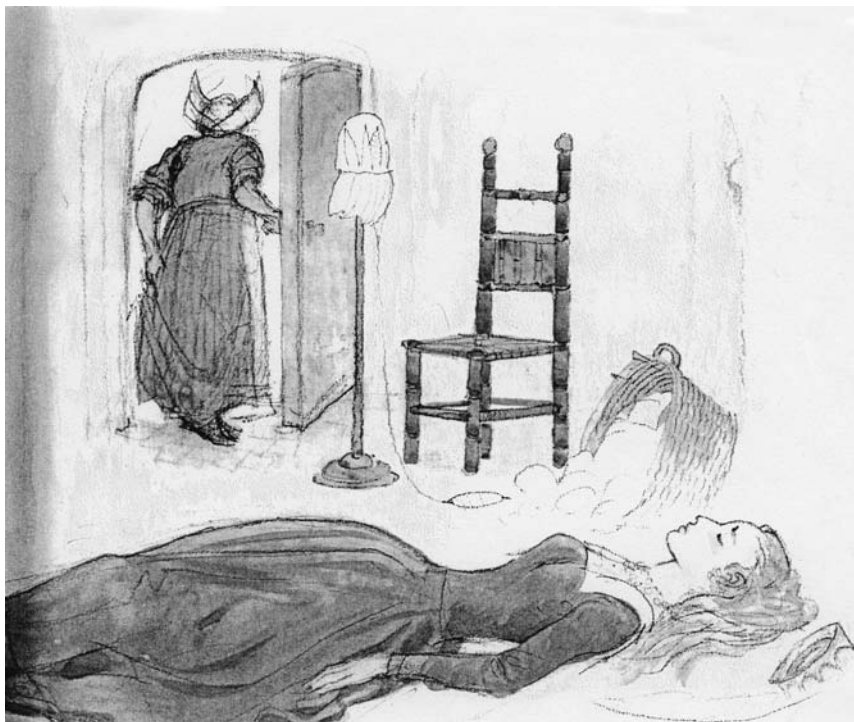


図3 絵：スベン・オッター『いばらひめ』1978年 評論社より

[追記]

本稿は、平成20年度特別研究助成費によって行われた研究成果の一部である。ここに謝辞を表す。(研究代表者：太田隆士，共同研究者：明石真和)

注

- 1) 野村滋『完訳 グリム童話集第3巻』2006年 ちくま文庫 p.38
- 2) *Kinder und Hausmärchen*, gesammelt durch die Brüder Grimm, 1996, Goldmann Verlag, S.220
- 3) Jens Thiele, *Das Bilderbuch Ästhetik. Theorie. Analyse. Didaktik. Rezeption*, 2000, Oldenburg, S.13
- 4) Jens Thiele, *Das Bilderbuch*: in *Taschenbuch der Kinder- und Jugendliteratur*, hrsg. Günter Lange, 2005, Hohengehren